

1、背景と目的：

「どんなに美人で仕事ができても、30代以上・未婚・子ナシは“女の負け犬”なのです」(『負け犬の遠吠え』(酒井、03年) 一巻では「負け犬論」が盛んだ。実際に男女ともに未婚率が年々上昇しており、生涯未婚率(2000年)は男性約12%、女性約6%となっている。このことは少子化にも少なからず影響を与えているだろう。

もちろん、「結婚＝人生の成功」や「結婚＝幸福」とは限らないし、「結婚しない」という価値観を否定するわけでもない。また、結婚しない人を結婚した人よりも劣っているとするつもりもない。ただ、「いい人がいれば結婚したいけれど、自分が望むような人との出会いがない」という声が多いのは事実である。かつて、筆者もそういう思いを持つ1人であった。20代は仕事で忙しく、30代になってようやく結婚を真剣に考え始めた。東京・青山に職場があり、仕事柄、毎日のように新しい出会いのチャンスがあったのに、自分が望み、相手からも望まれるような出会いは全く得られなかった。

人口密度の大きい都会では出会う異性の絶対数は多いはずだが、その分、同性のライバルも多い。果たして、都会にいれば田舎よりも結婚につながる出会いが多く期待できるのか？また、そもそも、30代になって出会いが少なくなったのはなぜだろうか？「結婚モデル」(基本バージョン・目肥バージョン)を作成し、未婚化要因について考察した。

2、主な設定：<>は変数

- ① 結婚市場に一定の<人口(密度)>で、男性と女性が1:0.95の割合で存在
- ② 途中で死亡したり、生まれたりしない。ほぼ同世代メンバーが一定の地域や職場で、ある程度長く暮らしている状態をイメージ
- ③ 未婚の人は結婚相手を求めてランダムに動き回り、<視野>内で出会った人の中の1人とつきあってみるが、<相手の魅力度>が<自分の結婚基準>を満たしているかチェックしあい、互いに満たしていれば結婚する。そうでなければその人とは別れて別の人を探す
- ④ 目肥バージョンでは「元カレ」「元カノ」の記憶がその後の相手選びに影響

3、結論：

- ① 基本バージョン＝原則として、人口(密度)規模、視野が大きければ大きいほど、既婚率の上昇に寄与することがわかった。
- ② 目肥バージョン＝「元カレ」「元カノ」のうち最も素敵だった人の魅力度が自分の結婚基準になるというルールを適用すると、規模や視野の拡大によるメリットを大幅に低減させることがわかった。山田昌弘氏の「もっといい人がいるかもしれないシンдрローム」論(『結婚の社会学』(山田昌弘、97年))を実証
- ③ MASは人間の“情念”や“悲しいサガ”の世界までも表現できるすごいツール！